

## 最末期の金沢蕉門

―東榮松氏所蔵宮森北葉関係俳諧資料をめぐる―

一戸 渉・高橋 悠里

はじめに

本稿は、石川県小松市において東酒造を営んでおられる東榮松氏御所蔵の、幕末から明治期の金沢の俳人、宮森北葉（天保十二年〔明治三十六年〕による俳諧資料を主とする資料群を紹介し、その目錄整理を試みたものである。あわせて当該資料群中の『歌仙集』（資料番号17）の全文を翻印した。東榮松氏の談話によれば、当該資料群はもともと同氏の母堂（故人）が、当家に嫁いだ際、実家である宮森家から持参して来られたものの由で、確かな伝来をもつ。当該資料群の存在は、稿者の管見の及んだ限りこれまで全く知られておらず、今回、東氏の御厚意によって初めて学界へと紹介させていただく機会を得た。ここに記して感謝申し上げる次第である。

以下に述べてゆくように、当該資料群は、従来の研究において未解明の部分が多い、明治二十年代から三十年代にかけての金沢の地における、いわゆる「旧派」の俳諧、換言すれば最末期の金沢蕉

門の具体的な動向を知る上での好資料であることは疑いない。当該時期の金沢俳壇の動向に関しては、竹谷蒼郎『北陸の俳壇史』（北国書林、一九六九）が、元禄年間から昭和四十三年に至る北陸俳壇の動向について年次を追って記述しており、有益である。とはいえ同書は、明治二十年代以降に勃興してくる新派の動向に比して、同時期の旧派の動向に関しては、年代記的な記述スタイルを採用しているためもあってか、いささか箇条書き的な記事が目立ち、就中、同書における北葉に関する記述に限っていうならば、後述のごとく先行文献を単に整理したに過ぎず、独自の要素は特に付け加えられていない。いずれにせよ、北葉をはじめ当該時期の旧派の金沢俳壇の具体的な動向については、大いに検討の余地を残しているというのが実状のようである。

本稿は未だ資料整理の段階に留まるもので、内容面の検討にまで十分に踏み込んだものとはいえない。とはいえ、上述したような今日の幕末明治期における金沢俳壇の研究状況に鑑みれば、その土

台となる一次資料の整備に着手することが、まずは求められるべきものと考ええる。本稿をひとつの敲き台として、当該時期の金沢俳壇史の研究が今後より一層進展してゆくことを望みたい。

### 一、宮森北葉のこと

当該資料群の旧蔵者である宮森北葉は、今日の俳諧史研究において、ほぼ忘れ去られた人物といつてよい。管見の限り、彼について触れている先行研究はごくわずかであり、石川県教育会金沢支会編『金沢市教育史稿』（一九一九）に、

宮森北葉は俳人なり。金沢新豎町一丁目に住し、唐木細工を以て業とせり、百鶴園を継席す、蓋雪杖の後なるべし、明治三十六年六月八日歿す、年六十三、掌に受けて見る御降の雫かな、時雨るゝや薫りの深き千代見草、等の詠あり

とあり〔一〕、大河寥々『加能俳諧史』（金沢文化協会、一九三八）の慶応四年条に、

北葉 時に二十八、姓は宮森、名は正規、新豎町に住んだ。明治卅六年六月八日歿、享年六十三である。雪杖の後ち百鶴園をついだ。

○百鶴園 「北枝」——希因——後川——北莖——春之坊——世涼——舎涼——舞杖——雪杖——北葉

と簡条書き的な記事がある程度。大河良一『改訂加能俳諧史』（清文堂、一九七四）四七六頁から四頁にわたって掲げられている「藩末

【以後の俳統等一覽】中の「百鶴園」項でも上掲記事以上の情報はなく、同じく前掲の竹谷蒼郎『北陸の俳壇史』明治三十六年六月八日条（一五八頁）の北葉が没した折の記事も、『金沢市教育史稿』に拠ったもので、新たな事実の指摘はない。いずれにせよ、如上の記事のみが、従来、宮森北葉について言及した先行研究なのであり、結局のところ、戦前の研究以降、何ら進展を見ていないというのが現状のようである。なお、右の記事における享年・没年月日から北葉が生まれたのは、数え年で逆算して天保十二年（一八四一）ということになる。

ところで、この時期の著作の常ではあるが、これらの先行研究の記述が何に基づいて書かれたのか、依拠資料が一切明示されていない。もちろん、これらが書かれた頃には北葉が没してからさして時を経ていなかったのだから、当時において、ことごとしく資料などを示して論証するに及ぶような性格のものではなかったのだろう。だが、われわれ後世の人間にとつては、こうした記述にどの程度まで裏付けがあるのか解らず、何とも歯がゆい思いがする。とまれ、このたび出現した東榮松氏の所蔵する北葉旧蔵資料群につくことで、いくつかの面で資料的な裏付けを与えることができるだけでなく、多少の訂正・増補すべき点が存在することが明らかとなった。

以下、それらのいくつかについて述べてゆく。

### 【雪杖との師承関係について】

従来の研究において、北葉は雪杖の門人とされているが、文献資料による裏付けなどはなされていない。さて、当該資料群の一つに

雪杖筆の芭蕉『幻住庵記』の一軸がある(資料番号1・稿末図版1・2参照)。恐らくは雪杖から北葉へと贈られたものであろう。雪杖と北葉との間に師承関係があったかどうかは未詳ながら、当該資料の存在から、両者に具体的な接点があり、しかも俳系の祖師たる芭蕉の作品を書写して与えるほどの間柄であったことは間違いない。ちなみに、当該資料に書写されている『幻住庵記』の本文そのものは、版本『猿蓑』巻六所収のものに基づいたものと考えられる。

この雪杖については、いくつか興味深い逸話が遺っている。かなりの長文であるが、黒本稼堂『三州遺事』下編巻二(稼堂叢書刊行会、一九三二)から「雪杖」項の全文を引こう<sup>②</sup>。

雪杖は金沢の乞食坊主にして、山雀とも号す。俳諧を善くす。ある富豪の人、息子に俳句を習はしめんとて、一夕招く。庭に薦をしきて座し、主人と相話す。「実は息子に俳句を習はしめんとて、招き申しゝなり。何とそれこれへあがりて下されたし。今夕よりは、息子の師匠なり」と云へは、雪杖「是は貧道の身分なり。俳句はいつこにありても、教へられ申す」とて、いかに強ても従はざりしと云。一日ある人、兼六園をすきしに、雪杖石にこしかけて、首にかけたる頭陀袋より歌集を出し、朱を加ふ。かたへによりてみれば、古今集なり。「古今集に朱を入るゝとは失礼ながら途轍もなきことならぬや」といへは、「いなしからず、歌集の見立は、時代によつて異なり。故に古今の世によしと思ひし歌も、今みればあしとみるもあり、まして詞遣にも誤なりともいふへからず。今の世に於て、愚見を加へおかすは、

他日百年の後、そのあしきを見出て、明治の世にその人なかりしにやと笑はれんもしるへからず。故に見立のよしあしは、ともかくも、其世々に随て朱を加へおくは、其時に生れし者の務なり」と云。之をきいて、ある人舌を巻きしと云。何の道に於ても、この量見なくては、芸は進まぬものなり。身は乞食にても嗟来の食はくはすの大見識。且つ其身分を守る。最尊むへし。明治の初年までゐたりし人なるへし。其句一首、

つめたくもなうて露けし夜の梅

更に、『金沢市教育史稿』の「福久屋雪杖」項に次の記事が見える。福久屋雪杖は黄年・卓丈・大夢等と同時の俳人なり。金沢石引町葉種商福久家に生る。或は云ふ、藩士山崎庄兵衛の落胤なりと。俳諧を梅室に学び、初名を薫坊といひ、後雪杖に改む。神谷淇園の後を継ぎて樗庵四世となり、亦た舞杖の後を承けて百鶴園九世と称せしが、故ありて破門せらる。雪杖材木町に住む。妻子なし。来る人の心に月も花もありの招牌を掲げて俳門を開き、後ち小立野新阪の上に小庵を結び、常に一個の包物を携へて飄然知友を歴訪す。終には其小庵をも失ひて十日宛俳友に寄寓せしことあり。彼の携ふる包物は雪杖が所有品全部にして、文房文具及び父母の位牌を蔵す。其墨硯は皆金泥を塗れるものなり。人の家に入る時は先づ之を開き、文台を据ゑ位牌を安置して香を焚くを例とす。句を得る時は途上と雖其文具を出し、腕を擧げて之を書す。時に先哲の俳書を読み、擅に雌黄を加ふ。曰く古人必しも誤謬なからざらんや。今にして黒白を正さずん

ば後世を迷はしむるを如何と。其七部集を講ずるが如き、該博精通、書冊なしと雖尽く之を暗誦す。雪杖後ち零落して藩の非人小屋に収容せらる。此時、鶯の出た山向いてなきにけりの吟あり。又尾上菊次郎と称して梨園に投ぜしことあり。不幸にして病を得、一時甞となりて大道に食を乞ひしが、温泉に浴して快癒することを得たり。爾後晴雨を論ぜず、傘を翳して逍遙し、人に請うて金錢を得、其状全く狂せるもの、如し。雪杖其得たる資を貯へて上洛し、故師梅室の墓前に至りて叩頭陳謝し、其の破門を宥さんことを請ひ、終に去つて自決せりといふ。梅檀の句も高し今日の月等の吟あり。(六〇一頁・句説点は私に改訂)これらの逸話が果たしてどこまで事実であつたかは未詳だが、何とも型に嵌ることのない、まさに畸人というべき人であつたことが知られる。とはいえ、彼の著作なども現時点では確認できず、右の記事以外の事蹟はほとんど伝わらない。管見の限り、金沢市立玉川図書館近世史料館富田文庫に所蔵される連句稿『余興業』(二三・九・八〇)に次の発句を確認できた程度である。

我が陰を掃き行夏の月夜哉 雪杖

【百鶴庵の継承について】

先行研究において、北葉は希因以来の百鶴庵を雪杖から継いだ人物とされている。ところで、当該資料群には「白鶴庵(園)」と墨書あるものが複数あり(資料番号11・14)、「白鶴」との印が捺されたものも存在する(資料番号16)ものの、「百鶴庵」との文字は一切確認できない。となれば、百鶴庵の継承についてはやや疑問が残

る。希因が百鶴庵と号し、それが数代にわたり、春之坊や世涼にまで受け継がれていたらしいことは、これも希因以来の暮柳舎の三代である車大編『道のともし』(文化十二年序刊)に模刻されている、卯辰山の医王院に、希因の息である後川の十七回忌にあたつて建てられたという水茎塚の裏に刻されていた「金沢蕉門家譜」によつて知られる<sup>3)</sup>。だが、その後の継承については、どうも判然としない。とはいえ、彼が用いていた「北葉」なる号も、金沢蕉門の祖にして蕉門十哲に数えられる北枝から一字を採つたものであろうから、その俳系を考慮するならば、百鶴庵を継承していても何ら不思議ではない。思うにこの「白鶴庵」なる号は、「百」よりも一画少ない「白」を用いることで謙退の意を示したものではあるまいか。無論これは稿者の推定に過ぎない。なお後考を俟つ。

【家業について】

『形之図集』及び『図所等秘冊』との外題ある写本(資料番号5・6)に、文台や箱などといった木工品の図が、寸法やデティールの指定などと共に雑然と書き留められており、双方とも表紙に「北陽齋／宮森正矩」との墨書がある。これらは「唐木細工を以て業とせり」との『金沢市教育史稿』の記事を裏付けするものである。加えて当該資料群中に、元は何らかの写本の裏表紙として用いられていたと思しい紙片(資料番号7)があり、そこには「万延元年申八月記之／宮森治作」との奥書と共に、「木工術／宮治」との墨書がある。宮森治作は北葉の先代かと思しいが、少なくとも一代前から木工術を家業としていたことが確認できたことになろう。北葉の後裔

にあたられる宮森祥世氏からの書信（以下、「宮森祥世氏書信」と称する）によれば、宮森家の先祖は、加賀藩に仕えていた御道具師であつたと聞いているとの由であり、これらの資料とも符号する。

#### 【名について】

『加能俳諧史』では名を「正規」としているが、当該資料群中にはそのように記したものは確認できず、先にも掲げた『形之図集』及び『図所等秘冊』には、いずれも「正矩」とある。どちらにしても「まさのり」と訓むものと思われるが、そもそも『加能俳諧史』の誤解か、あるいは両様に用いていたのかについては未詳である。

#### 【住居について】

東榮松氏の談話及び宮森祥世氏書信によれば、宮森家はかつて金沢市茨木町（現在の北陸電力石川支店の裏手あたり）の武家屋敷に居を構えていたとの由である。前掲『金沢市教育史稿』では、北葉の住居は「金沢新豎町一丁目」とされている。両者とも現在でも残る地名であり、位置関係も近いが、これ以上のことは未詳とするほかない。

#### 二、俳諧を通じた交友と諸活動

さて、当該資料中には北葉が仲間たちと巻いていた連句稿が複数あり、具体的な句作や交友関係について窺い知ることができる。以下、そうした俳諧を通じた北葉の交友及び諸活動について記述してゆく。

連句稿は当該資料中に九点が確認されるが、その内でも最も多く、八点に名が見える「北塵」ないし「百々庵」（資料番号12・15・16・17・18・19・20・21）は、『加能俳諧史』慶応四年条に、

北塵 時に四十七、金沢石浦町に住んだ彫刻師佐々一峰である。

百々庵と号した。明治三十二年六月四日歿、享年七十八である。

百々庵のち北仵がついだ。（五三二頁）

とある人であろう。北葉は唐木細工を、こちらは彫刻を家職としていた人物のようで、工芸家同士が俳諧においても親しい繋がりを有していた様子が窺われる。彼の編著としては、金沢市立玉川図書館近世史料館所蔵の北塵撰『小橋菅原神社奉灯句集』（K九一七〇六・大河良一旧蔵）や同近世史料館茨木文庫に含まれる句短冊類などが管見に及んだが、いずれも断片的なものに限られる。

また資料番号9の「甫立」とは、暮柳舎七世甫立であろう。いま試みに、その甫立と巻いた両吟の連句稿の表六句を引く。

紫陽花やはさみあてれば雨のちる 甫立

おい鶯の近う来る軒 北葉

案内者の都合に飯も用意して

川が明たら舟のたつなり

ぬぎ捨る毛簀重き暮の月

かをりこしかな苞の松茸

いかにも梅雨時らしい瑞々しく鮮やかな発句を受けて、紫陽花の咲くその庭に鶯を飛び来らせる脇句、梅雨が明けて後の川明けを待ち望みつつ、定石通り第五句で季節を秋に転じると同時に時刻も夕暮

れへ移り、土産として持参した松茸が香る夕餉、といった流れであろうか。ともかくも、両者の交誼を窺わせて余りある<sup>(4)</sup>。

このほか、資料番号16、21にその名が見える「来三」は、同近世史料館茨木文庫蔵「蕉風明倫教会金沢分院教導職交名書」(特三五・四二―一一)に、

同(金沢) 区長町川岸五番地土族 清水祐世 弘化元年八月生

同(俳号) 春星庵来三

とある人物であろう<sup>(5)</sup>。蕉風明倫協会とは、明治政府から俳諧教導職に任ぜられていた三森幹雄により明治七年に設立された明倫講社を前身とし、俳諧を媒介として、国民教化を成し遂げるべく設立された結社である。「蕉風明倫教会」への改称は明治十九年十一月三日のことで、それに伴って金沢の地に設立された支部の所属者名簿が当該資料ということになる<sup>(6)</sup>。同じく茨木文庫所蔵の尚友庵亀水

『蕉風分院開設の祝辞』(特三五・四二―一〇)には、

いにしへより神仏二道は吾朝の崇むる処なるに、年行月来つて  
仏は裏へ神道専らと成らは、王政の徳なるへし。今学ぶ俳諧も  
神道のひとつにして、月に日に盛しは人の知る処なり。茲に早  
くも

師か蕉風の分院を高岡町上簗のうちに開れし事神意に叶しや。

(後略)

云々とあって、俳諧と神道とを一如としたところに、彼らの活動が成立していた様子が見て取れる。なお「高岡町上簗のうち」とは小春庵桃芳こと野代谷徳次郎の居宅を指す。

さて、いささか興味深いことに当該交名書には、

同(金沢) 区 宮森 同(俳号) 北葉

と北葉の名も見出すことができ、更に「金沢区百姓町三十五番地平民」として、佐々一峰こと百々庵北塵の存在も確認できる。交名書によれば、この来三・北塵は同会の「訓導」職、北葉は「権訓導」とされている。訓導・権訓導は教導職に用いられた職位であるが、官吏としての教導職は既に明治十七年に廃止されているので、これはあくまで彼らが同会において活動を行う上での名目上の職階と見るべきものである。

いずれにしても、幾度となく連句を巻くなど俳諧を通じて密接な紐帯を有していたと目される北葉・北塵・来三の三名は、この蕉風明倫教会金沢分院に集つてもいたことが当該交名書から明らかとなった。となれば、同会の設立者である三森幹雄の著作『幻住庵記註』(資料番号14)が北葉の旧蔵資料群に含まれていることの意味も、容易に推察されよう。芭蕉著作の注解である同書は、恐らく同会での講義等の活動のための参考資料として書写されたものではなからうか。

なお、当該資料群中の連句稿には「乙雅」「竹笑」「舞水」といった俳号も見えるが、彼らについてはいずれも未詳である。

これらの連句稿の一部には「明治廿六年」とある資料番号20・21や、「明治卅年」とある資料番号17など、年記を備えたものも存在する。年記を欠くものも多いが、紙の風合等から判断して、いずれもおおむね同時期のものと目される。

### 三、宮森家伝来伝書類について

後掲の目録に記したごとく、当該資料群には卷子装の剣術・華道の伝書類四点が含まれている。所蔵者である東氏の談話によれば、他の資料と同じく宮森家伝来のものであるが、これらは別のひとまとまりとして残されていたものとの事である。従って、目録での整理番号には「伝」を冠し、他と区別できるような措置を行った。

事実、これらの伝書類は、その内容に照らしても、本稿で以上に論じてきた宮森北葉関連資料とは性格を異にする。とはいえ当然ながら宮森家との関わりは確認できる。宮森家の家系とも関わるものであるため、以下に判明した限りのことについて記しておく。

まず資料番号・伝一の『水野一伝流剣術初伝』であるが、広瀬頼一より水野一伝流剣術を伝受した宮森富岐雄については、荻野勝重『朝鮮及満蒙に於ける北陸道人史』（北陸道人史編纂社、一九二七）に次のような略伝が記されている。

羅南公立高等女学校長従六位宮森富岐雄氏は、明治七年金沢市に生れた。中学を卒業し明治三十年金沢第四高等学校を経て、同三十三年六月東京帝国大学文科大学哲学科を出で、同年十月招聘されて東京私立大倉商業学校（現在の東京経済大学・論者注）の教諭となり前後満十八年間といふ長い歳月を同校に過し教育に貢献したのであつた。その後拔擢されて台湾の台中商業学校の教諭となつて赴任し、大正九年七月には台北師範学校の教諭に転任した。越えて同十二年六月特に聘せられて朝鮮に入

り咸北羅南高等女学校長となり現在に及んで居る。氏は謹厳真摯の人格者で流石に哲学者らしき尊厳さがあり、而も温情の溢るゝところなどは、真に育英事業家としては全く先天的に好適者である。家庭には淑徳両全の侯子夫人（宮森祥世氏の御教示によれば正しい名は「侯」・「戸注」との間に二男二女があり、夫人は金沢高等女学校出身の才媛である。（四四八頁）

同書には肖像写真も掲げられているが、右の記事から、当時大陸に進出しつつあつた日本の動向に沿う形で、教育者として盛んに活動していた人物と知られる。また右に見える生年から、彼が当該伝授を受けたのは十五歳の折のこととなろう。

また、宮森祥世氏書信によれば、宮森富岐雄は東京帝国大学においてはインド哲学を専攻しており、同郷の出で、四高から帝大哲学科というキャリアの先輩（四歳差）にあたる西田幾多郎とも親しく、同家には写真なども残されているとの由である。事実、西田の明治三十年から明治四十三年にかけての日記中に「宮森」ないし「宮森富岐雄」の名が散見する<sup>7)</sup>。

以下、宮森祥世氏の御教示によって判明した宮森富岐雄に関する事柄を箇条書きに整理しておく。

- ・ 書を日下部鳴鶴に学ぶ（宮森家の表札は鳴鶴門の丹羽海鶴揮毫）。
  - ・ その後は輪島の女学校の校長先生として奉職。
  - ・ 富岐雄の父の名は「正矩（まさのり）」という。
- 東榮松氏の談話によると、この宮森富岐雄は当該資料群を伝えた

東氏の母堂の実父にあたるのと由である。右に整理した宮森祥世氏書信の内容とも併せて考えれば、北葉は富岐雄の実父であったとみて疑いない。ちなみに、富岐雄が生まれた明治七年には、天保十二年（一八四一）生まれと思しい北葉は三十四歳にあたる。

また伝授を受けた側の広瀬頼一に関しては、幕末明治期の剣術家であったこと以外にはほぼ未詳である。『石川県史料』第四卷（石川県立図書館、一九七四）所収「石川県官員履歴交名 明治十七年分」の「警部補」項に彼の名が見える（六九九頁）のは、そうした剣術の腕を買われてのことであろう。加えて、示野喜三郎『加賀武術の遺蹟』（金沢工業大学古武道部、一九九二）によれば、金沢市長坂の大乗寺に「（劍道）広瀬頼一先生之墓」と彫られ、明治四十一年七月二十一日に建てられた彼の墓碑が現存するという（九五～九六頁）。資料番号・伝―2／4の遠州流揮花の伝授書を作成した「松白齋」は未詳。これら三点の伝書の宛名書「玉雙子」と「一暁子」は、成立時期の近さから見て同一人物と思われるが、宮森家の人物かどうかも今のところ不明とするほかない。

### おわりに

以上、東榮松氏が所蔵する宮森北葉の俳諧を中心とする新出資料群について記述してきた。中でも連句稿の点数の多さは、彼の俳諧活動の軸が奈辺にあったかを示しているよう。近世期から続くこうした連句の営みは、とかく何事にもボレミカルな態度を崩さなかった

正岡子規らにより、「旧派」の「月次」とレットル張りされてしまい、発句のみを独立させて創作・鑑賞するありようが称揚された結果、前近代的で非文学的・没個性的なものとして、漸次衰退の一途を辿ったことは近代韻文史の常識に属しているよう。金沢の地でも、明治三十年四月には新派俳句の結社である北声会が竹村秋竹の主唱により結成され、その後、京都帝大の教授となる近世文学研究者の藤井乙男（紫影）によって率いられることになる。また、一方では同じく明治三十年、北声会の発足を受ける形で、新派と旧派との折衷的な結社である洞然会が石橋忍月によって設立される<sup>(8)</sup>。とはいえこの時期、維新以前に人格形成を終えていた人々は未だ壮健であったのだから、子規の登場によって、近世以来の文芸が全て死に絶えてしまったわけでは決していないことはいうまでもない。

こうした明治期の連句の営みは、今日における評価が高いとはいえず、おのずと俳諧研究の領域でも、資料面での整備が大きく立ち後れているのが現状である。だが、今日的な評価の高低と、文学研究における対象の選択とは（ある程度まで）無縁であるべきだろう。

元禄二年（一六八九）の芭蕉の北陸行脚に淵源する金沢蕉門の、末流中の末流である北葉らにとつて、日々の生活を彩るたのしみとして行われていた連句の営みもまた、明治文学の一齣にほかならないのだから。

なお、本稿では稿者の専門である文学関係の資料を中心に紹介を試みってきたが、これらの資料群は他にも、いささか断片的なものながら、木工関係や伝書類、大正・昭和前期の教育者宮森富岐雄の関



係資料など、様々な分野において研究資料として活用し得る可能性を有するものも含まれていることをいい添えておく。

## 注

- (1) 藏角利幸氏の御教示によれば、『金沢市教育史稿』に先行して、『加能俳人誌』（『加越能』第九年四、五両月号、一九一三年六月発行）に、ほぼ同趣旨の北葉に関する記事があり、『石川県俳壇百年誌』（石川県俳文学協会、一九六七）や先掲の『北陸の俳壇史』の記事もこれに拠ったものの由である。

- (2) 本文の引用にあたって、原文の片仮名漢字文を平仮名漢字文に改め、会話文に関しては鉤括弧で括り、句読点を私に訂した。

- (3) 医王院は明治期に廃寺となっており、かつて当該寺院があった場所には現在では観音院が存在する。ただし現地の境内を踏査してみたものの、残念ながら石碑の現物は確認できなかった。

- (4) 甫立に関しては、金沢市立玉川図書館近世史料館にて平成二十一年の春季展として催された展示「暮柳舎甫立没後百年俳書展―村松文庫寄贈記念―」に際して発行された展示パンフレット（<http://www.lib.kanazawa-shikawa.jp/kinsei/horyuu.pdf>）を参照）に詳しい。

- (5) 引用は『茨木文庫目録』（金沢市立玉川図書館近世史料館、二〇一〇）の解題において翻印されているものを参考にしつつ、原

本も参照した。また、同文庫は加賀藩平士茨木家の武家文書を中心とする史料群であるが、同家第九代の茨木操も蕉風明倫協会金沢分院に加わっていたことから、当該交名書が伝わったものであるう。同文庫には来三、北塵の句短冊等も確認できる。なお（一）内は稿者による補注（以下同）。

- (6) 蕉風明倫協会金沢分院の開設日については同じく茨木文庫蔵『俳諧雜記上』（特三五・四二―三）参照。なお、三森幹雄及び俳諧教導職に関しては、関根林吉『三森幹雄評伝』（私家版、二〇〇二）及び越後敬子「明治前期俳壇の―様相―幹雄の動向を中心として―」（『連歌俳諧研究』第八七号、一九九四）、同「明治俳壇の―様相―俳諧明倫講社の出版活動について―」（『実践国文学』第四八号、一九九五）、青木亮人「明治俳諧の「余情」と「只言」―三森幹雄と正岡子規の応酬から―」（『日本近代文学』第七五号、二〇〇六）、同「祖翁」を称えよ、教導職―明治の俳諧結社・明倫講社と『田中千弥日記』について」（『同志社国文学』第七一号、二〇〇九）といった両氏の一連の論考に多くを拠った。

- (7) 『西田幾多郎全集』第十七巻（岩波書店、二〇〇五）参照。
- (8) 千葉眞郎『石橋忍月研究―評伝と考証』（八木書店、二〇〇六）参照。

## 東榮松氏所蔵 宮森北葉関係資料目録

—附 宮森家伝来伝書類目録—

## 文学・語学

## ○俳諧

## 目録凡例

一、書誌情報は次の順に記述した。

整理書名 刊・写の別 形態 巻数・冊数 整理番号

編著者名 筆写者名 刊写年時 寸法 丁数（共紙表紙  
の場合は表紙含む） 序跋 印記 奥書・識語 別書名

## 備考

一、整理書名は原則として内題主義に基づき、内題を欠くものについては外題等を採用した。書題を一切欠くものについては、稿者の判断に基づいて適切と思われる書名を「」に括って掲げた。

一、編著者名や筆写年の記載を欠くものについては、稿者の判断に基づいて適切な記事を「」に括って掲げた。

一、奥書等の翻字にあたっては、原則として通行の字体を用いた。改行は「／」を用いて表記した。

一、整理番号は今回新たに付した。伝書類はやや性格が異なるものであるため「伝」を冠して区別した。

一、分類は『内閣文庫国書分類目録』に準拠したが、点数が少ないため独自に簡略化した。

北枝水荃塚録 写 半紙本 一冊 2

〔車大〕編 〔北葉〕写 〔近代初〕写 縦二三・三×横一五・九糎 全七丁 印記「北葉」 車大編『道のともし』（文化十二年序刊）の抄出本 巻末に「北葉所主」と墨書あり

梅室両吟集 写 小本 一冊 4

梅室編 〔北葉〕写 〔近代初〕写 縦一七・五×横一一・八糎 全三五丁 天保九年年風序・梅室跋 印記「北葉」（本文末） 板本の転写

〔句稿断簡〕 写 一葉 10

〔北葉力〕著 〔北葉〕写 〔近代初〕写 縦一八・〇×横五九・五糎 全一葉 一部の句の右肩に「春」「夏」「冬」と注記あり

## ○連句

〔甫立・北葉連句稿〕 写 半紙本 一冊 9

甫立・北葉著 〔北葉〕写 〔近代初〕写 縦二三・七×横一七・六糎

全三丁 貼紙訂正あり（一部剥落）

〔北葉・百々庵連句稿〕 写 半紙本 六冊 1 2

北葉・百々庵著 〔北葉〕写 〔近代初〕写 縦二三・一×横一六・三  
糺 全一八丁（各冊三丁） 図版3参照

〔北葉・北塵連句稿〕 写 半紙本 二冊 1 5

北葉・北塵著 〔北葉〕写 〔近代初〕写 縦二三・四×横一七・八糺  
全六丁（各冊三丁） 貼紙訂正あり

〔北葉・来三・乙雅・北塵連句稿〕 写 半紙本 一冊 1 6

北葉・来三・乙雅・北塵著 〔北葉〕写 〔近代初〕写 縦二三・七×  
横一六・八糺 全四丁 卷末に「北葉」「白鶴」「風月」「珍鳥」  
等の印記あり 藍色野紙使用

〔歌仙集〕 写 半紙本 一冊 1 7

北葉・乙雅・北塵・来三・舞水・竹笑著 〔北葉〕写 〔近代初〕写 縦  
二三・五×横一六・九糺 全二八丁 二五丁表に「明治卅年五月  
廿日月並会催」と墨書あり 藍色野紙使用 図版4参照

〔北塵・北葉・来三連句稿〕 写 半紙本 一冊 1 8

北塵・北葉・来三著 〔北葉〕写 〔近代初〕写 縦二四・一×横一七・  
六糺 全三丁

〔北葉・来三・北塵・乙雅連句稿〕 写 半紙本 一冊 1 9

北葉・来三・北塵・乙雅著 〔北葉〕写 〔近代初〕写 縦二三・五×  
横一七・九糺 全三丁

〔明治二十六年四月十七日連句稿甲〕 写 半紙本 一冊 2 0

北葉・来三・北塵著 〔北葉〕写 明治二十六年写 縦二四・一×  
横一七・九糺 全三丁 一丁表右肩に「明治廿六年四月十七日  
桜花見トシテ公園賢口亭ニテ催シタル三吟」と墨書あり

〔明治二十六年四月十七日連句稿乙〕 写 半紙本 一冊 2 1

来三・北葉・北塵著 〔北葉〕写 明治二十六年写 縦二四・一×  
横一七・九糺 全三丁 一丁表右肩に「明治廿六年四月十七日別  
冊同行」と墨書あり

### ○俳文

幻住庵記 写 一軸 1

芭蕉著 雪杖写 〔近世末明治初〕写 縦一二七・〇×横四一・七  
糺（本紙寸法） 全一葉 端裏書「幻住庵記 雪杖書」 奥書「梅  
意雪杖之坊書 印記「雪杖坊」」 軸装 図版1・2参照

幻住庵記註 写 半紙本 一冊 1 4

三森幹雄著 「北葉」写 「近代初」写 縦二三・〇×横一六・一糎  
全一一丁 表紙に「白鶴園主」、裏表紙に「力、北葉所持」と墨  
書あり 藍色罫紙使用

## ○俳論

俳諧金毛伝 写 半紙本 一冊 3

支考撰 麻斤坊編 「北葉」写 「近代初」写 縦二四・五×横一七・  
五糎 全四二丁 外題「金毛伝」 目録題「獅子門教示金毛伝十  
六目」 尾題「俳諧金毛伝教示」 印記「北葉」 卷末に「力、  
北葉蔵」と墨書あり 朱筆書入あり

梧一葉 写 半紙本 上下二卷・一冊 1 1

「伝芭蕉」著 「北葉」写 「近代初」写 縦二四・〇×横一八・〇糎  
全三四丁 外題「芭蕉翁秘伝書／梧一葉 全」 葉（ママ） 雨老  
人・紀逸序 源千之跋 識語「印／芭蕉翁梧一葉可秘者也依而加  
跋書如此也／肯宝曆二壬申二月 大黒庵印／附与／嵐胡主人」  
「平時亭／亀青印」「酔月／素俣」「此一書我風雅に（略） 反古  
菴／素川印」 裏表紙見返に「力、／白鶴園北葉所有」と墨書あ  
り 付帯資料として明治三十二年の北葉自筆歳旦句稿二葉を挟  
み込む 芭蕉仮託書

発句案方等秘伝 写 半紙本 一冊 1 3

「北葉」写 「近代初」写 縦二三・七×横一七・五糎 全一二丁 印  
記「北葉」 裏表紙に「力、北葉蔵」と墨書あり 「発句案方乃  
事」「序題曲乃事」「切字の事」をはじめ芭蕉・宗祇・月空居士ら  
の秘伝と称するものを書き留めたもの

## 芸術・諸芸

### ○木工

形之図集 写 半紙本 一冊 5

「北葉」編・写 「近代初」写 縦二三・四×横一五・九糎 全四三丁  
（付帯資料一葉あり） 表紙剥落 印記「商亘」 表紙に「北陽  
斎／宮森正矩」と墨書あり 「ばせを二見形文台」や「珠光好竹  
台小桐」などの木工品図案集

図所等秘冊 写 半紙本 一冊 6

「北葉」編・写 「近代初」写 縦二四・三×横一七・四糎 全三三丁  
（付帯資料あり） 表紙に「北陽斎／宮森正矩」、裏表紙に「宮  
森氏」と墨書あり 木工品図案集

## その他

〔未詳書裏表紙乾〕 写 一葉 7

宮森治作写 万延元年写 縦二三・二×横三一・五糎 「万延元年申八月記之 宮森治作」 「木工術／宮治」と墨書あり

〔未詳書裏表紙坤〕 写 一葉 8

〔北葉〕写 「近代初」写 縦二二・五×横三一・八糎 「宮永屋所持」  
「北葉」と墨書あり

## 附 宮森家伝来伝書類目録

### ○劍術

水野一伝流劍術初伝 写 卷子本 一軸 伝―1

広瀬頼一著・写 明治二十一年十二月写 縦一八・一×横二〇六・二糎 印記「広武館」「頼一」 宛名書「宮森富岐雄殿」 外題「一伝□初□（□は剥落）」

### ○華道

〔遠州流挿花初伝之卷〕 写 卷子本 一軸 伝―2

松白斎著・写 明治十四年八月写 縦一七・九×横一八一・八糎

宛名書「玉雙子」 表紙欠

遠州流挿花中伝之卷 写 卷子本 一軸 伝―3

松白斎著・写 明治十五年写 縦一七・四×横一七七・七糎 宛名書「一曉子」

遠州流挿花皆伝卷 写 卷子本 一軸 伝―4

松白斎著・写 明治十七年写 縦一七・二×横二五四・五糎 宛名書「松晴斎 一曉子」



残り蚊の一ツ出てくる広の秋

碁経に隙をつふす老楽

昔から左遷人の絶ぬ嶋

銀の融通の多い織絹

数重代花の主と名の高き

崖と口に鳴かはす雉

雅

葉

塵

雅

葉

塵 (三ウ)

粒雨も漏らぬ木下や苔清水

叩く千鶴にしらむ短夜

材木にこち／＼印打込て

洩する網の臭き裏口

人数に配りし月のじり膳

囹を飼ふに隙をおしかる

霽上る空に稲<sup>ゐ</sup>苅る一在衆

揺つて居れば寝入矢田かに

寄と早博奕仲間の怕なき

まはらぬ筆で夫の去状

口下手は実も嘘に聞ゆなり

薬師の葉のふさう夏瘦

能い月に晒す難波の冷し瓜

神棚の灯の光り輝

砂原に犬と雑交寝の物貰ひ

剪矢の当る舟の帆柱

遥／＼と帶たる雲も花の光沢

北葉

来三

北塵

葉

三

塵 (四オ)

葉

三

塵

葉

三

塵 (四ウ)

三

葉

塵

三

葉

最永き日にさかりする蛛

形もなき咄しの実る春の旅

眉にこたゆる繻の貫指

門口に恨交りの獨り立

閨の臣<sup>て</sup>燧にけふる炭貝

獨の子の可愛かる程愛らしき

塩の利目の足らぬ生魚

入込に鹿相勝なる着貫宿

笠の印の残る雨漏り

懷に一ツ残し握り飯

日毎／＼に釣たるゝ也

花の散る頃に小寒き都哉

帰る名残りを思はする雁

出作りに小屋を繕ふ畑打

漏せは味き野路の玉水

乗れかしなふら／＼戻る四手駕

拍手打ては剪る蜻蛉

たそいかに割木を運ぶ夕月夜

草にすけなう移る秋風

塵 (五オ)

三

塵

雅

塵

葉

三 (五ウ)

葉

塵

三

雅

塵

葉 (六オ)

雅

塵

三

葉

塵

葉 (六ウ)

三

北葉

江の水もすむや餘寒の空も澄

芽張り柳の すはる四阿屋

何人歟春の旅路を袴着て

北塵

舞水

来三

三

寒洩れに長くさし込む月の口  
噪しい程虫の鳴たつ  
釜の音も更行俣に秋めきて  
叱られてから直す口下口  
青東風に簾をおろす長局  
振袖月を打水の様  
亀井戸の社に近き柳足る  
見覚えのある顔の樽蒲伐  
灯提の邪魔になりたる月明り  
蒲田辺に夜毎鶴聞  
新酒の徳利居らぬ春疊  
所望しられて短冊を書  
咲花に公の御成を饗応して  
胡蝶のかけの映る塗棚  
長閑さに庭の主好を作り替へ  
和尚となつて銀の調達  
都合能く出水の跡の治りぬ  
別れの旅の寒き衣く  
枯尾花踏音さへも忍はれて  
操返し見る大和口(綴)文  
貸かりも心置なき隣り同士  
犬の悪るさに破り出る垣  
雨の日は網つゝくりて暮しけり

三  
葉(七才)  
水  
三  
塵  
水  
葉  
塵(七ウ)  
乙雅  
塵  
雅  
葉  
雅(八才)  
葉  
塵  
水  
葉  
雅  
水(八ウ)  
三  
葉  
雅

枝かき切て埋み焼く栗  
四五人て月に初める艸博奕  
鳴たつ比は野に人もなし  
輦は内親王と蹲踞き  
砂打払ふ狩衣の裾  
立割に切目正しき冷し瓜  
広き宮居に並ふ掛茶屋  
散る花に類へて磯の桜貝  
雲雀の声の空に口々  
口ももの凄き木下や苔清水  
慈悲心鳥の声の心ちす  
五里三里海の瓢を携て  
奢りの高き温泉屋の家造り  
昇る月居りて松の面白き  
露のしめりを請る蝙蝠り  
参り衆に誘はれたる秋江湖  
三年ふりで孫の顔見る  
鏡台の黒塗色の光沢く  
霞飛込む化粧の水  
門口は後妻り打に騒かしく  
九条あたりは田舎めくなり  
雨は晴れ月済渡る橋の上

塵  
葉  
三(九才)  
塵  
雅  
三  
葉  
塵  
雅(九ウ)  
北葉  
北塵  
舞水  
葉  
塵  
水(十才)  
乙雅  
水  
塵  
葉  
雅(十ウ)  
水



鳴子を曳きに鬨引て出る

塵

かいわひも射勝に宮の秋の寝

葉

脱捨てある牛馬の沓

雅

蔵と家建る狭間に花咲て

水

鯉の嗅を論ふ のにお □に

葉 (十一才)

奴紙鳶池鯉鮒を指して切て行

塵

無質の鳶を云置る樽蒲

葉

札打に見よかし顔の羅具陀連

塵

二階の噂洩るゝすゝかせ

葉

かさ／＼と紙帳をたゝむ中舎り

塵

失たるものに易の考断

葉 (十一才)

破軍星晴曇見る□□頃

水

ちと山松に鐘のからころ

葉

借て来た眼鏡の能くも眼に合ふて

雅

暮かはしまれは煮ぬ釣釜

塵

月の庭行望きたる老の世話

水

処かへたか啼すさふ虫

葉 (十二才)

(十二才・白紙)

温泉息りの帯解く風の柳かな

北塵

はつ蛙さく門の遠近

北葉

佐保姫の対語に机引寄て

塵

酔醒の茶の味ひのよき

葉

弓張の月にも暈の圓なり

塵

乱るゝ露に裾の冷へつゝ へッ

葉 (十三才)

指はつす木兔の隠る芋畑

塵

山の字に名の高き寺

葉

うしろかみひかるゝ恋の衣／＼に 乙雅

朝妻舟を埋む夏霧

来三

梳る度に髻の拔易き

塵

塞に小窓明る情強

葉 (十三才)

雪はさらりと止て月鮮

全

野つら鳥居を潜る小男鹿

三

秋風に大官人の歌よみて

塵

陸奥紙に包む貝壳

三

旅先へ花も咲しと文の来る

雅

葦除きておろす両掛

塵 (十四才)

鳴かはす雉子に鶴のからころと

葉

月出□き斗を祝ふ孫産

三

御囃か済めは薄茶を振舞ふて

塵

底の流れの面白きさひ

葉

忍た兎せ□とも色にあらはるゝ

葉 つゞ

誰か忍てそいかき足跡

雅 (十四才)

急く程囊の水柱のなか／＼と

三

餌かつれ鳥に吹矢ためらふ

塵

小童のさかす継母の袂底

三

加茂へ詣て投る賽銭

葉

いとゝさへ清き小川に月の照り

雅

露にしたれて石撫る萩

三  
(十五才)

秋分の日からそろ／＼渡る雁

葉

仏を負ふて巡る西国

塵

洪水の難にも会ぬ年の宿

葉

牛馬の尿も捨ぬ一物

三

百両に手折せ□る花と松

塵

弥生寒みも知らぬ日盛り

葉  
(十五ウ)

咲芥子に大きく思ふ雨の粒

北葉

遊ぶ鹿の子の潜る柴垣

来三

瓦焼く下地の土を取寄て

乙雅

笠の印の□てわからず

北塵

能い月のあるに木影の小闇かり

葉

泥川筋は重き稲丹

三  
(十六才)

秋かせにかたまり易き苞の飯

雅

寺を□意に廻る輪置

葉

初老にもならぬうちから若白髪

塵

言葉遣ひもあらき小原女

雅

陰膳に糠味噌積の初茄子

三

太郎次郎も手を合す月

塵  
(十六ウ)

神垣の紅葉かつ散る潦

葉

□りに邪魔な刀預ける

塵

物云はぬ人よ何処やら奥深き

三

出来分限に亦建る蔵

葉

千代万世を経る花の二抱

塵

囃子も済んで跡の永き日

雅  
(十七才)

雲雀よりまた上に見る風

葉

比叡と伊吹の□□に峰

塵

旅日記源五郎戦も咄種

雅

榎火も陰り払ひをる晒落(雨力)

葉

思ひ合ふ中には対に口説あ□

三

御師の情に質を請出

塵  
(十七ウ)

鐘聞た後へ続いて時鳥

葉

薄雲□て夜は白む也

三

引水に備へを替る新田勢

塵

海なき国へ送る塩物

雅

丈高き松かえ当の月の宿

葉

芦の穂綿に風誘ふ暮

三  
(十八才)

瀬の折／＼来ては荒す籜

葉

向鉢巻をもて駈出す

雅

夢なれと門の構へは宮構

葉

一字も読めぬ制札の文字

塵

年経ても色香の高き須磨の花

塵

波より先に笑の山／＼

三  
(十八ウ)

落たるさまかけり月の桐一葉北葉

音のきひしきのちの鳴竿  
 結さしの御難に虫の鈴ふりて  
 軒に置たる利鎌目□□  
 算るほと浮て流るゝ玉霰  
 洗ふて返す鰻汁の椀  
 行戻り竈の神に額きて  
 鶏を塙へ呼て寝させる  
 物音を氣遣ふ圍の屏風腰  
 こほるゝ客を恥る□□  
 追／＼と白馬に水の増て来る  
 牛を叱るに悲しき声  
 並松に月鮮に登る也  
 柴の編戸に秋の傾  
 手に障る琴聞橋の露時雨  
 鐘の供養に建る高札  
 世渡りも易／＼出来る花の頃  
 供もそゝろに歩む弥生  
 □刀□の汐染む砂に錆ふきて  
 遥に翳す八柴の峯々  
 乗寄は身延参りの念珠擦て  
 木賃て焚す家々の米  
 雨漏に壁のなたるゝ古畳  
 苦説に猫を打て気晴す

北塵 来三 舞水 葉 三 塵 葉 三 塵 水 葉 水 三 葉 塵 水 三 葉 水 三 水

(十九才) (十九ウ) (二十才) (二十ウ)

張る口を絞りて捨る物憂さよ  
 鎮守を□ふ桶の下□□  
 上野から根岸を余所に風涼し  
 行けは又来る蕎麦の声  
 指昇る月に次足す雁の棹  
 始も畢も続く出来秋  
 渋柿か下りて天窓撫る道  
 衣の袖のいかい釘裂  
 検約の札置るのも表向  
 雛鶴なから作る空□  
 晴上る崩の見ゆる花の色  
 野は一色に緑る若艸  
 鳴子引人の案山子に似たる哉  
 群る鴉に啼渡る雁  
 夕月に絞り鹿子を染上て  
 濡手拭はす膳に付けり  
 覗くさへまた春寒き竹格子  
 栖の縁を翻す落風  
 夜越舟伏見下りの暖さ  
 蕎麦てしのきを削る空服  
 恋らるゝ身は恋るより猶つよき  
 義理にせまりて眉落也

三 塵 葉 雅 三 葉 三 雅 葉 三 笑 葉 来三 葉 笑 塵 三 雅

北葉 竹笑 北塵 乙雅 来三 葉 笑 塵 三 雅

(二十一才) (二十一ウ) (二十二才)

錦絵の白羽□□も□□

葉

涼しき月の映る葛水

三(二十二ウ)

鈴付て遣れは悦ふ子飼犬

葉

内侍を見舞大原の雪

塵

松杉の中に伽羅の奥深き

葉

花に謡の声も高く

笑

指さして雲雀算へる道すから

雅

昨日に替へる麗な山

葉(二十三オ)

(二十三ウ・二十四ウ・白紙)

明治卅年五月廿日月並会催

川風の枝から飄す蜚来

北葉

折節薫る御芦の葉玉

北塵

歌枕歩荷飛脚に道問て

来三

酒に投出す勝は耳白

竹笑

飼牛の気味よく肥る月の秋

乙雅

侘たる垣にまとふ□□

葉(二十五オ)

鮭築の横を角力て取返し

塵

堂嶋下のし居る焼印

三

移り香のはつと吹たつ黒羽織

葉

積る雪にもさめやらぬ恋

雅

裏の戸の節穴隠す火防札

三

餌拾ふ鶏をなふる子供等

葉(二十五ウ)

並松に十六夜ひ月の明残り

塵

露のつらなる芋の葉の上

三

秋の風居処かへる売卜者

雅

発燭をさかす風呂の引出

塵

雛の客花見る客とふた立に

笑

京の咄を仕合ふ□□

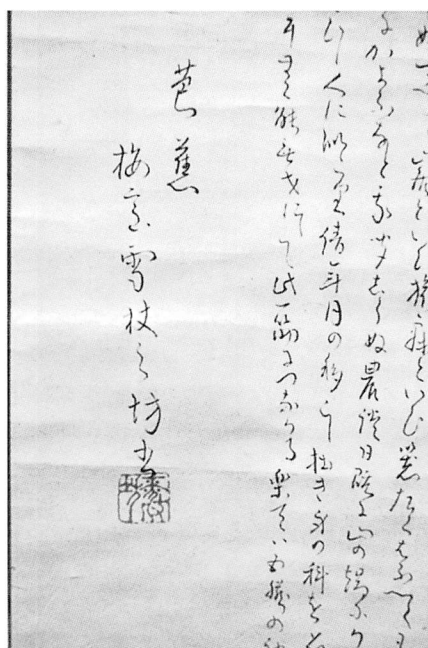
葉(二十六オ)

(二十六ウ・二十八ウ、白紙)

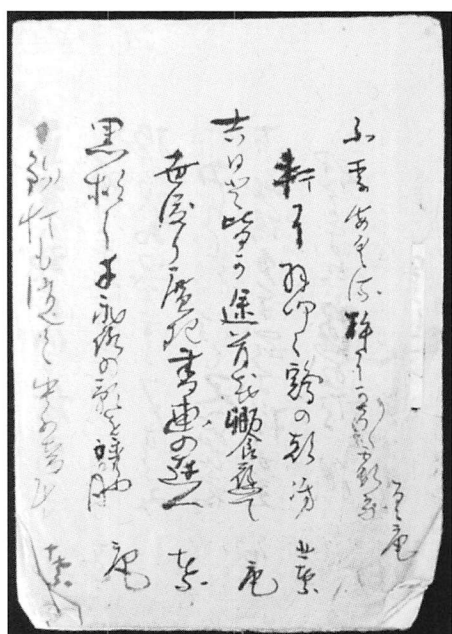
【付記】本稿の作成に際して、高橋は『歌仙集』の翻印を担当し、適宜一戸が助言を行った。その他については全て一戸が執筆した。なお、『歌仙集』の翻印については、原本の文字に判読の困難な部分が少なくなく、甚だ不十分な形で公表することとなったが、まずは読みの素案を提示することを優先した。諒とされたい。また、引用文中に今日の基準からすれば差別表現に該当する語があるが、歴史資料としての性格上、原文のままとした。資料の所蔵者である東榮松氏、並びに宮森北葉の後裔に当たられる宮森祥世氏からは、本稿を成すにあたり種々の御教示と御高配とを賜わった。加えて藏角利幸氏からは当該時期の金沢俳壇について御教示を賜った。末筆ながら改めてここに記して深謝申し上げる。なお宮森北葉関係資料に關しては、近日中に金沢市立玉川図書館近世史料館に寄贈される予定であることを付記しておく。



図版2 幻住庵記の雪杖署名部分



図版3 「北葉・百々庵連句稿」



図版4 「歌仙集」

